

一般社団法人 日本LD学会

第20回大会

Japan Academy of Learning Disabilities

20th Annual Congress

＜発表論文集＞

大会テーマ

「あらためて問う発達障害児の学習支援」

— 知能・学力・生きる力 —

2011年9月17日(土)～19日(月・祝)

開催校／  筑波大学
University of Tsukuba

会場／  跡見学園女子大学 (文京キャンパス)

成人した発達障害の現状

～ 生きる力を育む就労支援と継続 — ディスレクシアの場合 ～

司会者：藤堂 栄子（NPO法人エッジ）

話題提供者：深川 猛（NPO法人エッジ）他5名

榎本 達彦（明星大学）、木村 志義（(株)ジョイコンサルティング）、

指定討論者：梅永 雄二（宇都宮大学）

発達障害のなかでも読み書きが困難なディスレクシアの就労は自分の困難さに気が付いていない場合も多く、就職に不可欠な履歴書を書くことから始まり、うまく入社したとしても、議事録を作成する、電話を取る、メモをとるなどの仕事の基本が出来ないため、周りから誤解を受け、精神的に苦しくなったり、転職を余儀なくされたりすることが多い。本人がその困難さに気づいていないことも多いので、高等教育の進路選びも仕事選びも見当外れになってしまうことも多い。

ディスレクシアだけで障害者手帳を取得するのは大変困難であるうえ、その判断のもとになる、適切な診断が出来る医者はほとんどいないのが現状である。見た目、判られないことが多く、できることと出来ないことの差が激しいため、自分が得意とする分野での仕事とマッチングすればよいが、それでも読み書き計算がはかばかしくないがゆえに、パワハラを受けたり、頑張りが足りないといわれたりしているのが現状である。

NPO法人エッジでは福祉医療機構の助成を受け当事者が創る、ディスレクシアの人のための就労ガイドブックを作成する事を目的として、2年にわたってワークショップを行なった。本シンポジウムでは合計12回のワークショップを通して6名のディスレクシア当事者がどのように変化したのか、その決め手は何であったのか、を本人たちから発表してもらおう。また、プログラム作成の目的と成果と企業から見たディスレクシアの雇用についての話題提供がある。

6名の紹介を簡単にすると以下のとおりである。20代から50代までの男性5名と女性1名；院卒1名、学部卒3名、専門学校卒2名；障害者手帳あり1名；カミングアウト当初3名、2年後5名；海外で暮らした経験4名。

Aさん 食品会社勤務。高校卒業後就労、その後社会人入学、大学卒業時に障害者手帳を取得したが、なかなか思わしい仕事とめぐり合うことが出来なかった。ちょうど自分の専門性が生きる職場の求人あたり、就労した。情報支援機器を駆使し、職場の理解を得るようになってきている。

Bさん 外資系のゲーム会社に入り、部門の縮小で退職。その後一年かけて自分で仕事を探し、知的障害の施設の支援員となる。面接時にディスレクシアである事を伝えて入った。コミュニケーションスキルと工夫で引き継ぎ時のミスを防いでいる。得意の陶芸指導の担当になった。

Cさん 5年前からNPOの職員。自分で探し当てて一年ボランティアをした上で職員になった。自分のペースを守ること、出来ないことを引き受けない、問題が起きてもあわてずにどう処理をするかを知ることによって、仕事がやりやすくなっている。

Dさん 衛生商品のレンタルの営業を5年ほど行っている。唯一自分の困難さについて職場に言っていない。物静かであるところが相手に警戒心を起こさないためか、営業成績も悪くはない。今の仕事づくまではいくつもの仕事を経験している。

Eさん これまでもいくつもの職場を経験している。保険の仕事をしていたが、退職をした。そのあと、障害者の起業コンテストで準優勝し、その賞金で代々木に総菜店を起業。抜群の企画力で障害者雇用をしたり、ユニークなメニューを開発したりしている。

Fさん 2年目からの参加である。建築家として海外で資格を取り、日本で武者修行。日本の職場ではボスが報道で本人の事をみてディスレクシアの事を知っていたにもかかわらず、議事録作成を強要されたり、直属の上司からパワハラを受けたりして、驚愕している。

プログラムはまず、メタ認知に当たる自己理解、出来る事、やりたい事、好きなことを探す、自分の困

難さとそれをどのように工夫して乗り越えているのかを共有する事で学ぶことから始めた。そのあとでどのような仕事があるのか、企業は何を求めているのか、を知りその上で起業の人たちの前で自分を発表する疑似就活体験をした。また、多くのメンバーが転職を重ねていることから2年目は継続して働くために何が出来るかをそれぞれの工夫の中から共有する事や、体験から学ぶ事が出来た。

一年目は「働きはじめる前に」というテーマで行った。まずはハローワークに行ってみた。障害学生の窓口は用紙に記入をしなくてはまず受け付けてもらえない。いくら読み書きが困難であることが障害であると口頭で説明してもだめであった。転職の係りの方は、よくは分からないなりに2時間ほど時間を割いてこちらの話聞いてくれた。しかし、どちらも障害者手帳を持っている事が前提であった。地域や担当者によって最近ではだいぶ対応が親切になってきたようではある。

ワークショップは自らを知る、自分のいいところは、自分の出来ないことは、自分は何をしているときが一番楽しいなど普段あまりじっくりと考えない事に時間をかけて解きほぐしていった。夏には合宿をして、就職活動をするうえでの一番の鬼門である「履歴書」について考えた。手書きのエントリーシートでなくては受け取らない会社；会社によっては書き入れる情報が違ったり、様式が違ったりする；読み書きが困難であると情報が間違ったり、数字が違ったり、正確に書こうとすると時間がかかったりして、日本の就職活動にはついていけないというのが参加者の多くの意見であった。結論は自分のよさと特技をアピールする履歴書とツールを用意して、提出する。それで会ってくれない会社は入ったとしても居心地の良いところではないだろうという事に落ち着いた。合宿の二日目はリフレーミング、言い換えをする事で、弱点も強みに代わることを行った。また、自分のことをどのように伝えるのか、企業のはなしを聞く等を経験した。

2年目は「継続して働くために」をテーマにまずは一年の振り返りから始まり、合宿でケースワークに時間をかけて行った。働いている当事者3名を中心に働く上での困難さと工夫、そして失職中の一名とは強みや価値観などに関して参加者全員で聴き、意見を交換した。

読み書き計算や記憶の問題は昨今の情報支援機器でずいぶん補完する事が出来るようになってきた。実際に手に取り、使ってみる事で自分に合った機器を知り、活用出来るようになってきた。読み書きは困難でも企画力や発想力、行動力は並み以上に備わっている場合は起業という方法もある。また、企業は何を求めているのかという話を企業の採用担当者から聞く機会も得た。

社会の仕組みを知るといことで社労士、会計士をお頼みしてそれぞれが社会保険や税の仕組みについての説明の後、一人一人にふさわしい形を知ることが出来た。

6名のディスレクシアの当事者が2年間ワークショップを通して自分の強み、困難さを見つめ、どのような働き方が出来るのかを模索した。6名6様の答えが出てきたが、手帳のあるなしに関わらず自分のことがわかり、それをうまく雇用者に伝えることが出来るようになった。

また、それぞれ自分の努力が足りなくて出来ないと思い込んでいたことが、実は共通していることが判っただけでも随分と楽になり、また企業のはなしを聴くことで「就労にはこの資格が必要」という呪文から解き放たれただけでも大いなる成果であろう。例えば車の運転免許が取れない、または取れたとしても何回も筆記試験を受けなおしてからだったとか、議事録を取るのに多大な時間がとられ、いくら出来ないと説明しても受け入れてもらえないなどということは、いやなことは言い訳を思いついてやらないだめな人という印象を与えるのだろうが、そうではないことを共通認識できたことも、またそのような場合どのようにして、またはどのような機器を使って凌ぐかも共有できた。

参考：福祉医療機構—ディスレクシア就労ガイドブック

福祉医療機構助成事業—報告書

インターネットラジオ <http://www.voiceblog.jp/dx-station/>

キーワード：成人ディスレクシア，就労支援，メタ認知